

特42
850

双
鏡

寶鏡
縮屋
村助
相語
全





叙

人河豚を喰ひて其毒にあてられ生命を害ふも我暴食を悔ひて河豚と怨ま
 す人娼妓に耽り梅毒の傳染を鼻を失ふも我遊蕩を悔みて娼妓を怨まざる
 彼より毒と勤めしにあらす我より之を求めしが故あり然るを婦の舌頭
 一掛り手管の畏れに陥るに至る時怒り恐むの甚きハ彼我と詐せりと思ふが
 故あり不言や外面女菩薩内心如夜及と河豚梅毒又笑異あらんや愛を以て
 化作氏己之吉殺しの事を綴り血氣未だ定らざる人の爲る物言花の激毒た
 るを示し思案の外に繩張を爲んとするハ花柳の園の紫山子心にやあらん
 呵々

梅亭金鷲識

實説 縮屋新助物語

東京

梅亭化作編述

○第一回

茲に深川仲町ふ尾花屋龜次郎といふ者あり此家の抱への藝妓にて己之吉と呼ぶ花走子の其性素を尋ぬれば文化年間の頃幕府の表坊主を勤し伊坂長齋といふ者の舎弟長左衛門の娘にて本名美濃と呼なせる者なりしが故ありて尾花屋の抱へとなり名を己の吉と改めたりさて此商業の習慣として晝も懸置軒の端の花提灯の裏面に妙見菩薩表に赤と心を示すにや紅色深く定紋を畫さし下に己の吉と一際目立三ツの文字二くづし格子の光澤清く麻の葉組あるれんじ窓鴨居の棚は神燈の不動稻荷や辨才天影も曇らぬ天神に掛る糸の三筋は弾く根も粹の本調子身己作りし端唄さへ床しき節も聞すれば客の最負も深川に十九の春の色香を夥多の人の訪競ふ就中吉田甚之助(歌舞妓ふて縮屋新助に作)とて此頃迄さりに馴染を重て來りけるが己の吉の八丁堀のさり河岸に住船宿の主人鈴木や熊次郎といふ情夫あり

て深く言換し二世の契の有るうといふ露知らざれば彼甚之助の今日もまた永代寺門前なる藤岡といふ割烹店へ彼己の吉を呼迎へ酔と盡て戯れけるが該家の女主人の宮が扱ひよて萬事に如才内証の進退さへも上手なれば此處と得意に甚之助如梭通來りけり此甚之助の本郷五丁目に住して吳服と鬘最繁昌の店ある吉田甚兵衛の長男なりしが甚之助が幼き折父甚兵衛の亡靈の鬼籍の數あ入けるも甚之助の姉に養子をひかへ甚兵衛と名乗せける然るに甚之助十七八より花街の遊びを好げれと甚兵衛の養子の身意見をし



ても用ひざれば是非あしと其儘打捨置ければ甚の助の新吉原の妓樓扇屋が飾へ通ひ花扇といふ遊女と深く馴染末の夫婦と言換しがふとしたことより彼己の吉に迷ひ出し結びし仇夢覺やらで夥多の金銀を遣ひ捨家も歸るの稀にして彼藤岡の奥二階下女のお琴と相手にしつ酔を盡して臂枕折柄梯子を揚つて來巳の吉それと見るより甚さん誠に濟ません最と早く上る處をいやあお客の座の勤實も吾儕も困りましたが漸々歸して來したから今日のもつくり召わがれと言ハ此方の甚の助今日山の松本で屋敷の人お誘引無理に飲たせいかまう一吸も飲あいと今もお琴ばうに言譯としてゐんだ「オヤ／＼言く脱まそね深川の松本あの花扇さんと云花魁のあい管「マヌお株が始まつた扇屋への松の内一二度義理に行た限北郎へのとんと足が向ぬ兎角辰己へ吹付られると是より又も酒宴始まり巫戯て其日の暮しけり

○第二二回

己の吉ハ此間から病氣と言て座敷を勤す家に居る其處へ彼鈴木や熊次郎表より己のさんと言ッ、格子がらりとわけ内に這入ハ己の吉がぬや熊さんかハ丁度いま暫留主でゐないか

ら氣遣あしにお揚りなど言ハ熊次ハ己の吉に今客の供で石塙まで來のだから寛りしてゐられあいが病氣と聞たから一寸尋ねに寄たのだが瓜彈でもする様なら自己も安心だ「おや貴郎ハ安心か知らないが吾儕ハ貴郎と斯云内情にあつてから客の機嫌も取かねるゆゑ無理なお酒を過たり始終苦勞をするせいか折頃身体が弱くあつて座敷を引も度々あり必ず浮氣をおまであいよと言ハ熊次の莞爾笑ひ今江戸中に尾花やの巳の吉と云ハ誰一個知らぬ者のあい程音に響し全盛の和女も深く契りしハ男冥加に叶ひしと旦夕



辰巳の方を向拜んで居程大事に思ふ何で浮氣をするものかと言ひ辰巳の吉笑を含み人を馬鹿
 ふゆしであい八幡様でいあるまいし辰巳へむかつておびつと馬鹿くしひにも程がある
 と惚た同志の痴話苦説に我を忘れて居たりしが熊次郎頓て必づき若此處へ内の者が歸つて
 來ると間が罷から止まといふに夫の然と此間だ同業同志の花骨牌に少斗り穴を開困て居る
 が十兩斗り如何月未まで用立て呉まのかと言れて巳の吉小首を傾げ丁度來月更衣でお金の
 入處だから四五日待ておいでさら吾儕の方から沙汰をするヨ手紙の届くを待ておいでさ
 それい何より忝けねへと首つゝ點頭熊次郎其金印の本郷の目的を責る積りだろ「ア、差
 向きお金の手懸りの彼奴と責るが近道ゆゑ萬事吾儕お任せしておゝ」算段さへして呉るさ
 ら如何此方の日影の如何割でも喰ていると語り合ひしが内の者が歸り來れば面倒と約束
 なして熊次郎表の方へ出行けり

○第三回

文政三年辰三月木挽町森田座の狂言の隅田川花御所染といふ名題にて岩井半四郎と松本幸

四郎が大坂登りの名残り也とて吉田松若丸
 が七代目團十郎清玄尼が半四郎信夫の惣太
 が幸四郎にて近年稀ある大入るし貴賤男女
 の差別なく此狂言を見ざる者ハ恥の如くに
 言囉せば辰巳の廊も評判高く皆藝妓等の
 己がまよく客に冀望て見物する者ある中
 に彼甚之助ハ五六日病ひの床に臥けるか彌
 生中旬に全快せしりハ彼藤岡の二階に到り
 美濃吉ヲ招森田座の芝居へ同行して見物せ
 んど進けれハ美濃吉ハ打しはれ吾儕も暫時
 病氣にて打臥るたる其うへに更衣さへ近付
 たれば今四五十圓の金あきてハ劇場へさへ

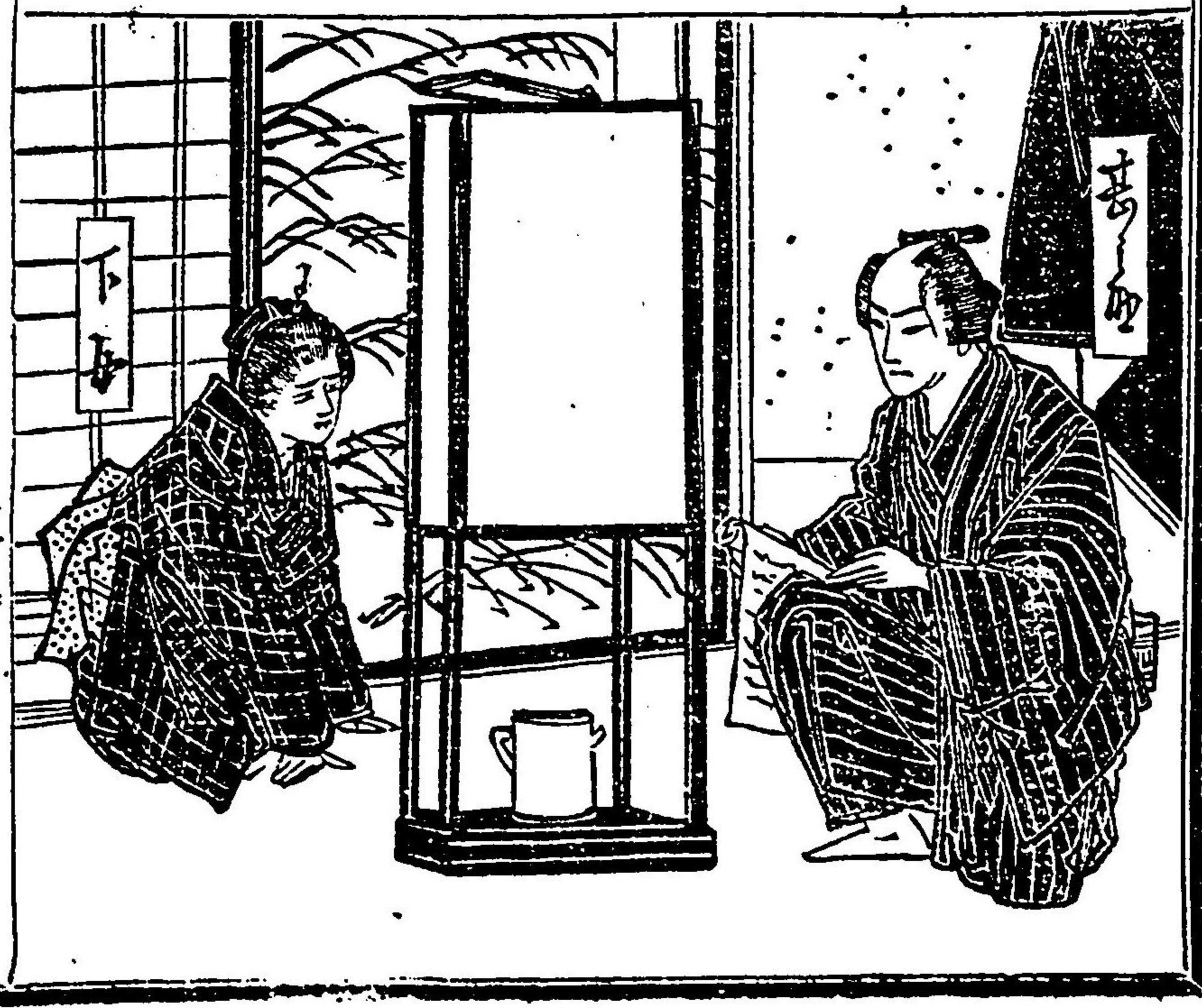


も行れぬ由愛ふ沈みて語りけるに甚之助の情夫熊次郎のあるを知ざれば頼りに憫然を催し
 て懷中より有合せし金子二十圓取出し美濃吉み與へ残り芝居へ伴なう時渡すべしまた藤岡
 の下女琴まで連行べしとして過分の纏頭を與へ十八日と日を約し其日の迎ひの船をよこすを
 堅く約して歸り行を棧橋まで見送りて美濃吉座敷に戻れば琴の更に燭を直して二階へ來
 り己のさんまふとに有難とふお蔭で芝居が見られますと莞爾笑つて四邊を見廻し聲と低め
 て言けるよう實に己のさんの手のあるに吾儕も感心いたしましたと云れて己の吉笑と合
 度々やらかす無心ゆゑ少きまりも悪けれど彼熊さんが頼もる泣て首尾よく欺かしたがそ
 どの知す馬鹿面の彼甚的が明後日の芝居といふの思いつき其折お金を熊さんに渡して咄た
 い事もあるのだが明後日ゆゑ今から一寸せられせれば間に合ひぬこともあるまゝお琴さんお
 ねがいが一寸使やを呼でおくれと云へお琴の返事をまかけ點頭ながら己のさん使い屋の
 宜がお茶屋の名前の「サア失策た肝腎のお茶屋を聞のをさつとり忘れた迎ひの船の甚的が
 よこすといふから小松屋は相違ないけれどお茶屋を何處だか知ないで熊さんを呼ぶが

いねへ何にしても使いやをたのんで甚さんの
 の處へやり聞あひせるが一の手と硯取よせ
 甚の助と熊次郎とへ手紙をかいて送らんと
 認む筆の命毛や硯の海は深くとも薄さ心の
 薄墨に書玉章がもつれ己のことしら波の吹
 よする築地の濱の蕨屑ぞと明日と樂しむ二
 個こそ最もあやうき者なるべし

○第四回

復説尾花屋己の吉の甚之助へ贈る文と熊次
 郎に贈る文と二ツ封じ其上書を心急れ書違
 しとの露をらす使いの者に渡しければ使屋
 へ一足逸八丁堀熊次郎が宅に到り夫より本



郷五丁目甚之助方へ赴きしが双方とも不在なれば返事も聞かず人に託し使の者の立戻たり甚之助の此間彼花扇が詭に通ひ居續ちして黄昏ころ微醉機嫌で我家に歸り眠に就んきする折から馴たる下女が袂より手紙取出し手渡させバホ、笑て深川より甚さまと認めあるの巳の吉と察せば大方芝居のことを忘るゝなといふ念であるふと言つゝ封を押切て行燈引よせ燈りをかきたて讀下す其文の隠語で解らねど本郷の馬鹿に歎き首尾よく欺して二十兩の其處で直に巻揚たが跡の残り明後日芝居にて渡すといふ都合ゆゑと書認めてありしかば甚之助の助の大呆れ情く考がへあひすれば彼奴が間夫に送るべき密事の手紙を取ちがへ我に送りし者あらんそらといひ知す今まで不慙に思ひ目を懸しが斯まで我を欺むくといひ夢露知せ殊に過分の金を貪り馬鹿よ白痴と嘲弄の言語お絶たる毒婦めと齒とくひまばり擧と握り汝どうするか覺へていろと怒の面色血を濺ぎ暫時白眼で居たりけり却 説熊次郎も巳の吉が文の届し日の金策のために近在まで行十八日已刻過に歸つて留守に届きたる文を抜いて小首を傾け名宛の本郷の甚之助へ木挽町の茶屋の名と問合せる文体なれば甚之助の助方へおくる

文を封じ違て届けしならん何にもせよ誤つて密秘の文を彼旦那に見れた日あの大變と周章外へ飛出し急ぎ尾花屋に至己の吉を尋ければ此家の内儀が立出ておや熊さん生憎だつた巳之吉の今朝早く本郷の旦那から迎の船をよこされて木挽町の芝居へ誘引て行ましたと聞て熊次郎の不審晴ねど少心地も落付たれば再び熊次郎の内儀も向私も是から彼處へ行己の吉さんに是非會て少し咄とせねばならぬが芝居の茶屋のと問ければ梅林とかいふ事と聞き熊次郎の歡喜挨拶あしつ此家をいで木挽町ある芝居茶屋梅林として



一足早く飛が如くに赴むさけり

○第五回

熊次郎の己の吉が茶屋を知れども梅林より行て何かにふ都合と思へば悪意の留場を依頼
向正面の割込にて其跡よ此許よと見渡せば己の吉の彼藤岡のお琴と俱に東棧敷の程よさ
處を借切てゐれども如何ある故か甚の助の其席にをらねば熊次郎不審く思ひたれど却つて
おらぬぞ僥倖ありと頼てのよと己の吉が棧座に至れば彼方の歡喜熊さん貴郎を待ていた
よそうして何處か見物のわの一件のお依頼も首尾よく行たと云事の手紙と上たが届いたか
へと問きて熊次の聲を密め届いたことゝ届いたが夫に付て心配したと云時茶屋の若衆が先
み立つ、案内をし旦那がお出にありましたと云れて熊次郎の鑑さながら振向處へ甚の助入
來りて素知らぬ面に四邊を見廻せば熊次郎も極り悪くころくおして自己が處に立戻り肩
身狭くぞ見物なしける甚の助のお琴に向ひある程ゑらゐ大入だ己も一處に今朝早く船で誘
引積りておつたが據ころさい用向で今迄ひたひ引留られた如何お琴面白か「ハイ其面白い

に付ましても旦那にお目に懸たいと己の吉
さんがお待兼と云へ己の吉お琴に向ひ旦那
の北里の御用向で大そうお手間が取たのだ
よと云時甚の助の笑ひながら成程和女の云
通り彼花扇に引とめられそれゆゑ遅刻あつ
たのさとお口でいやみの云おがせど此貉めが
言合せ手間とれたのと僥倖に船頭風を彼男
と示合して自己を欺む馬鹿の白痴のとあ
ざけりて多くの金を奪とんず薄情あまの所
存かど心に思へば狂言も更お面白からずし
て始さ口惜さむすれかね物をも言でいたり
ければ己の吉の氣に懸り頼に機嫌とりあし



て自己も酒杯すてせども彼熊次郎に咄もあらず如何いせんと胸を痛むる其うち芝居も漸やく終けれバ梅林まで夜食を濟せ此處を出れば茶屋の亭主に女房まで有難うお静ふと甚の助を送りだし若イ衆等の川端まで送るも一世の名残ぞと白浪よする船に打乗り甚の助の己の寺に廻から辰己で飲直そう「アイ左様ておくんないあ之を聞き常に出入の船宿神田花房町小松屋伊助の持船 雇男の勘次郎が旦那今日のお樂み己の吉さんさど面白う座い升たろうと解く 纜が死出の旅頼三途の川近く漕て行とも知らぬ身の二個が運も築地の波除稻荷の角を離る折しも時分よしと甚の助隠持たる短刀を抜より早く己の吉が眉間を深く切付れバ「アレ」と云て逃んどすれと立事叶はぬ家根船の中を頼りよ這廻ると鬚を掴んで引倒し膝にまつかど敷すゑて怒る聲を振立ッよくも甚の助を踏つけあましたなそうとの知らず汝が身を不愼と思ふ心より夥くの金を欺ひかれ揚句の果お此自己を馬鹿の白痴のと口惡して鈴とか云る男と謀わくまで誓る汝の胸中惡事の報ひの自筆の文の間違から自然に知れる天の罰サア其男の何者だと責さいあみて突立れと知らぬ」と泣叫ぶ聲さへ最と哀あり

甚の助のお琴をとらへ汝れもお己のと同腹だおサア鈴といふ男の何處の奴だと問れし時までも琴の更に生たる心地あかりしが逃んどすれど波の上船に打伏身を慄いせ私に何も存じませぬ何卒助けて下されと云どもさかぬ甚の助云すバ斯だと胸先を刺通けバ噫と叫もがく柏子お身をすべらし海へドンブリ落入たり船頭勘次も是迄と身と躍らし飛込さま岸邊をさしてぞ泳ぎける甚の助の己の吉にといめを刺今の恨の念晴たり我も是より死に就んと血お染む短刀とりあやし胸元を刺貫き水に飛入り死してけるの最



あつたしきとにぞありける

○第六回

斯勘次ハ陸に上り頼て南本郷町ある自身番所へ事の由をぞ訴ける此時届書ハ左の如し

本郷五丁目家持甚兵衛妻の弟甚之助二十二歳

深川仲町彦兵衛店龜次郎抱

深川代永寺門前町平六店料理茶屋店

神田花房町文二郎店船宿渡世伊助召使

右ハ當十八日木挽町芝居見物に罷越梅林鉄之助方にて酒食致し同夜築地波除稻荷の際南

本郷町海上にて右始末に及び聲立に付町役人罷越ハ處家根船右河岸へ流れ着きたるに

元町より彦檢使相希ハ

また右始末落着 申渡されの受書

一深川永代寺前門町平六申奉 上ハ私店みや後見利助下女ことと申二十歳に相成ハ者

三味線藝者みの十九歳

後見利助下女琴二十歳

氷主勘 次二十七歳

當十八日同成仲町彦兵衛店龜二郎抱藝者
みのを連本郷五丁目家持甚兵衛弟甚之助
と申客に誘引神田花房町文治郎店伊助雇
船又乗込築地邊まで罷越船中よて同夜四
ツ時頃甚之助子細老らせ己と害し琴甚之
助俱水中へ飛入ハ様子にて兩人死骸相知
まうさ依之同十九日御訴申上ハ處ハ
檢使之上夫ハ御調口書差上一同被召出
琴甚之助死骸見當り次第御訴可申旨ハ
沙汰に付海中所々相尋ハ處大森村川岸に
琴死骸これあり甚之助死骸ハ深川洲崎沖
にて見當り兩人死骸彦檢使の上取捨被仰



付以上

辰三月

永主勘次郎申渡されの寫

神田花房町文治郎店伊助召使勘治郎

其方儀當三月十八日本郷五丁目家持甚兵衛弟甚之助船を雇ひに付同人を乗深川永代寺門前平六店みや後見利助下女琴並ふ同所仲町彦兵衛店龜二郎抱藝者みのを雇一同乗船して木挽町狂言座元權之助の芝居より立戻りの際船中にて甚の助みのを殺害し琴と水中へ突落し甚之助も自殺水入致ひよ付同處より陸に上り町役人共へ相斷り得共右變事出來の上取計ひ方も可有之を無其儀既にみの琴まで殺害に達甚之助自殺致ひの不注意の事に付手鎖百日申付る

辰四月十二日

右の如くよて落着にありしかば尾花屋龜次郎己の吉の死骸を引取り懸に吊らひて自己

が菩提所谷中川端本壽寺に葬りける其墓今尙存せりおその法名を斷迷妙脫信女と云り

また甚の助が死骸の檢使の上例の如く非人に引渡しの處兄甚兵衛が之を賞請手厚く野邊の送りをおし谷中團子坂下浄土宗道生院へ葬りしが甚の助慈母姉俱々悲歎に袖を絞し最も哀れのことあり茲にまた新吉原扇屋の遊女花扇の彼の甚の助が變死を聞最と哀れを秋の野の尾花に宿る露の玉消て果なき夢の世の假寐るがらの樂しみい年が明たら夫婦ぞと待し詮なき仇浪の寄て返さぬ戀の淵どう詮術も築地がたうかびもやらぬつらさ身内酒袖ぬらす涙の雨ふかこくまもなき女郎花のいとと萎れて見えたるの實は人情の誠にて理せめて哀れも花扇の髪を切て甚之助が棺の中へ納め回向唱名心の限り盡せし最も婉婉しき心根を時人感取りしとぞ復説己の吉の一件江戸市中の評判とあり其頃流行とうたに

三下り

「ひとりたててるえんせつの心のうちいささの世とまのふ春雨かさともみの吉名のなみや拾小船戀と旅路を三人づればはくあき夢の海ばらや

此事を狂言に作り其年七月十五日より中村座よ於て忠孝染分戀女房の仕組へこの吉殺

と加へお妻八郎兵衛と名を替て演し役割の古手屋八郎兵衛と關三十郎藝者お妻お岩井三郎あり後萬延元年に至り猿若町市村座あて八幡祭小望月賑と題し越後新助縮賣と替名して市川小團次が務尾花屋巳の吉を野花屋みよ吉として岩井三郎が務しより此方甚の助名を知る物稀にして縮屋新助美代吉とのみいひあせり

双紙 縮屋新助物語

明治十七年二月九日御届

(定價四錢)

編輯兼出版人

東京府平良

森 仙吉

日本橋區横山町 貳丁目十六番地

大岡天	同村井	同倉重	同後傳	同越田	同水香	同山資	同下茶	同石孝	同塚孝	同白孝	同天孝	同龜孝	同伊達	同佐達	同船重	同佐重	同野重	同慶重	同寛重	同中山	同名草	同天草	同北草	同松草	同宇草				
坊	長	四	吉	九	九	越	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝	孝			
談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談	談			
彦左	水戸	血	難	真	石	豐	清	佐	日	親	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日			
門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門	門		
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代		
記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記		
曾	小	鏡	鈴	半	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於		
朝	栗	山	木	半	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於		
官	判	主	主	長	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定		
勢	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初		
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	
記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	
會	為	小	鏡	鈴	半	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	
我	朝	栗	山	木	半	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	
勢	官	判	主	主	長	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	定	
一	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	初	
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代
記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記
義	木	將	小	梅	三	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	於	
經	會	門	野	若	勝	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
辨	義	一	道	若	半	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
慶	仲	一	風	若	七	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
一	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代
記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記	記

實 說 雙 紙 出 版 書 目 鶴 聲 社

と加へお妻八郎兵衛と名を替て演し役割り古手屋八郎兵衛又關三十郎藝者お妻お岩井榮三郎あり後萬延元年に至り猿若町市村座あて八幡祭小望月賑と題し越後新助縮賣と替名して市川小團次が務尾花屋巳の吉を野花屋みよ吉として岩井榮三郎が務しより此方甚の助名を知る物稀にして縮屋新助美代吉とのみいひあせり

双紙 實説 縮屋新助物語 終

明治十七年二月九日御届

(定價四錢)

編輯兼出版人

東京府平良

森 仙吉

日本橋區横山町 貳丁目十六番地

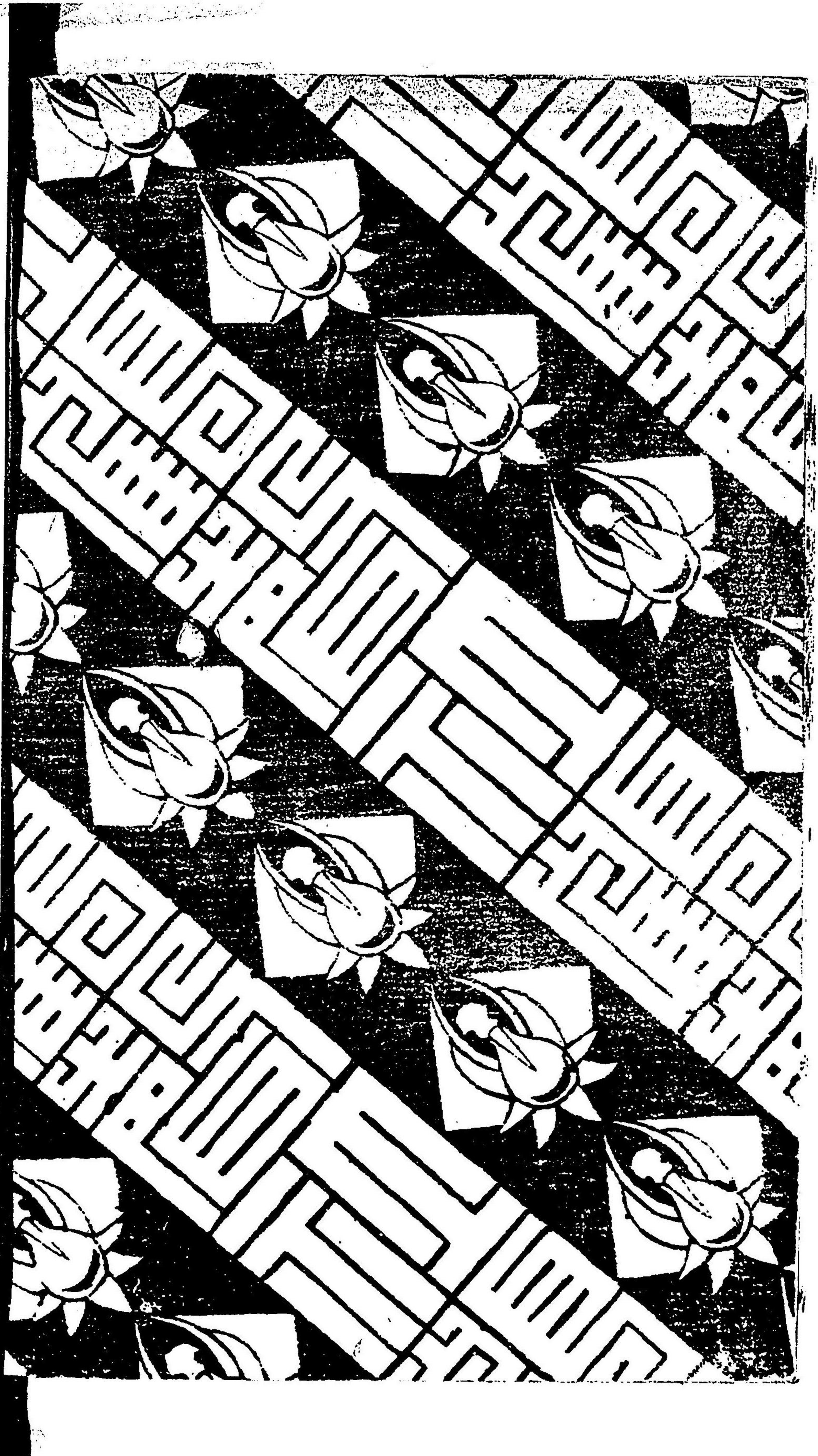
實説 双紙 出版書目

鶴聲社

大岡天 井長坊 政談
同 村重四郎 政談
同 越後傳 政談
同 秘田於花 政談
同 水香村九助 政談
伊賀 山孝子 仇討
白下 茶屋子 仇討
鷺塚 孝女 仇討
伊達 義顯 秘録
佐倉 右衛門 勇門
船越 重右衛門 勇門
佐次郎 右衛門 勇門
慶安 永箱崎 文平
寛永 山問 文代
名譽 紀文 禮代
天草 大文 禮代
北雪 金澤 美談
松前 屋五郎 兵動
宇都宮 騒動 記

彦左衛門 一代 記
水戸 黄門 一代 記
皿屋敷 戰代 記
難波 三大 戰代 記
石田 鐵山 西軍 記
豊臣 朝臣 鮮軍 記
清賀 正朝 鮮軍 記
佐賀 賀朝 鮮軍 記
日蓮 上人 御代 記
親鸞 上人 御代 記
祐天 上人 御代 記
弘法 大御 御代 記
中條 小姫 御代 記
小野 諸國 御代 記
魁神 於松 御代 記
尼子 十勇 御代 記
高尾 右衛門 助物 記
毛谷 右衛門 助物 記
石川 五右衛門 助物 記
高田 馬場 義士 記
川中 島大 戰記

曾我 朝我 勢 記
爲朝 判官 一代 記
小栗 判官 初代 記
鏡山 主水 初代 記
鈴木 主水 初代 記
於半 長右衛門 初代 記
於旬 傳兵衛 初代 記
國定 忠次 初代 記
阿波 鳴谷 順禮 記
梅川 忠兵衛 順禮 記
七吉 三松 物 記
お七 久松 物 記
花川 兵衛 助物 記
於三 茂兵衛 助物 記
三勝 半七 物 記
梅若 松若 一代 記
小野 道風 一代 記
將門 義仲 一代 記
木曾 義仲 一代 記
義經 辨慶 一代 記



特42

850

双葉説

縮屋新助物語 全



205253-000-9

特42-850

縮屋新助物語

梅亭 化作/編

M17

EDV-0311

